

## 第10章 「中英交渉」下の香港体験

### 日本と香港で体得したこと

文革路線と決別し、近代化への道を選択した中国と外側の世界との関係は、政治の時代から経済の時代へと、大きく動いていった。中でも、中国が重視し出したのは、日本や欧米など西側先進諸国との関係、そして海外に住む中国人系社会、すなわち華僑・華人社会との関係であった。そこには、なお封建時代の残滓を根深く内包した中国の社会主義が、経済建設という新たな至上命題を背負いつつ、さまざまな形の資本主義社会との交流を求め、その経験に学ぼうとする姿勢が強く働いていた。

先に記した深圳経済特区での実践もその重要な一環だが、ここでは日本と香港で体験した、記憶に残るエピソードを紹介しておきたい。

#### 人民日報取材団の来日

一九八〇年の春、中国言論界を代表する『人民日報』の大型取材チームが、朝日新聞社の招きで来日した。この訪問は前年の秋、人民日報社の招待で訪中した朝日新聞側の返礼の形で実現したものだった。

当時は、日中国交正常化の際に田中角栄首相を補佐し、外相としての大任を果たした大平正芳氏が首相の座にあった。大平さんは一行と快く会見、一時間近く和やかに懇談した。「貴国が近代化の道を力強く踏み出したことを心から歓迎します。日本にはよい面もあるでしょうが、欠点や悪い面もたくさんあります。この両面を、じっくりと見ていってください。その上で、いつまでも日本と仲のよい友人でいてください」

会見の随所に、今は亡き、敬虔なクリスチャン宰相らしい、朴とつな誠意が感じられた。代表団の取材期間は、四月中旬から五月初旬にかけての三週間。訪問地は、東京を中心とした神奈川、千葉、埼玉などの首都圏から、大阪、京都、奈良、核被爆都市の広島、さらに北海道の函館、根室、札幌に及んだ。

朝日新聞社は、その取材網を動員して一行を案内した。首都圏を俯瞰する取材には大型ヘリコプターを飛ばし、富士山一帯も見学した。

北海道視察の際には、東京から小型ジェット機二機に分乗、ギリギリのラインまで北上して北方領土を眺望した。

取材範囲も、首相会見を頂点に多岐にわたった。主要な経済関係官庁、製鉄所、自動車工場、電子企業、総合病院、大学・研究所、都市の団地や農村での家庭訪問、スーパーマーケット、地下街の見学、観光産業や地方都市の開発状況の視察一。

#### 日本の資本主義に関心

取材先には、前年秋の訪中取材に参加したベテラン記者たちが同行した。そして、訪中代表団の秘書長役を務めた私は、始めから終わりまで、全行程を一行と共にした。

日がたち、取材が進むにつれて、お互いの心も急速に開けていった。ある日、代表団の一人が「中国ではいま、青少年の犯罪が急増しています。この機会にぜひ、日本の警察の青少年補導と防犯対策を知りたい」という要求を出してきた。ちょうど、五月の大型連休の最中だったが、社会部のアレンジで、警察庁の責任ある幹部が五人、分厚い資料を携えて駆けつけ、熱心に説明してくれた。

取材の全日程が終了、一行の帰国の日がやってきた。成田空港の待合室で取材体験の感想を求めてみた。

「日本の資本主義はどうでしたか」

こんな質問に、記者の一人が答えた。

「日本的資本主義是值得学習的」(日本の資本主義は、学ぶに値するものだった)

「ホントですか」

と聞き返すと、真顔で言った。

「本当ですとも。マルクスの書物で読んだ資本主義と、実際に体験した日本の資本主義の間には、大きな差異があった」

案内したかいがあった、という喜びに駆られて私は言った。

「東方に生まれた日本の資本主義は“修正資本主義”です。だから中国もどうぞ“修正社会主義”の道を歩んでください。“修悪”でなければ、それでいいじゃないですか」

当時はまだ、中国では“修正”という言葉は、禁句の状態であった。皆は一方で苦笑しながら、他方では私の手を固く握りしめていた。確かな人間としての共感があった。

#### 中英交渉の焦点・香港へ

ところで、中国大陸の内と外を結ぶ「共生への模索」は、その重要な接点である香港とその周辺の経済特区で進行しつつあった。そして、そんな香港へ一九八二年春、特派員として勤務することになった。香港への短期訪問は何度かあったが、長期の滞在は、香港大学へ語学留学生として派遣されて以来、実に二十年ぶりのことであった。

中国が経済建設を最優先に、対外開放と経済の活性化に力を入れ出してからは、香港の地位は一段と重視されるようになった。しんせんアモイ

中国の党中央、国務院はすでに一九八〇年五月、広東省の深圳、珠海、汕頭、福建省の厦門に経済特区を設けることを決定。とりわけ、香港に隣接する深圳経済特区の建設には、拍車がかけていた。

しかも、こんなタイミングをとらえて、一九八二年夏に始まったのが、「香港の前途」をめぐる中英両国政府の交渉であった。

周知のように、香港は長い間、英国の植民地とされてきた。すなわち、アヘン戦争の結果、一八四二年の南京条約で、香港島（七十六平方キロ）が英国に割譲され、アロー号事件による一八六〇年の北京条約で、九龍半島の突端部である九龍地区（十平方キロ）が英領になった。さらに清国の弱体化につけこんだ英国は一八九八年、九龍半島の残りの全部である新界地域（九百五十九平方キロ）と二百三十五の島、付近の海域を一九九七年まで租借する九十九年租借条約を結んでいた。

#### 英に主権と治権の分離論

だが、「香港の前途」をめぐり、中英双方には根幹の部分で見解の相違があることが明らかになってきた。

中国側の基本的立場は、新界地域の租借期限が来る一九九七年六月三十日いっばいで、英国の香港全域（香港島、九龍地区、新界）に対する植民地支配は終了。七月一日午前零時以降、中国は香港全域の主権を一括して回復するというものだった。

これに対し、英国側は、香港島と九龍地区は清国が英国に永久割譲したものであり、たとえ「主権」は返還しても、「治権」（行政権）は留保したいという姿勢をのぞかせていた。だが、中国側は、香港に関する過去の条約は完全に不平等条約であり、これらは一律に清算されなければならないとして、主権と治権の分離論にも全く耳を貸さなかった。

一九八二年九月、当時の英首相だったサッチャー女史が訪中、この根幹問題で中国の実力者、鄧小平氏と会談した。

しかし、鄧氏は原則問題では頑として譲らず、これには、「鉄の女」と言われたサッチャー首相も、なすすべがなかった。

中英交渉で、香港の現状維持を強く望んでいた住民たちの多くは、中国側の強硬な姿勢に嫌気がさし、一時期は香港ドルや不動産の暴落なども手伝って、「香港の前途」は不安で敏感な問題となっていく。また、香港駐在の日本人を含む外国人の心境も複雑で、悲観論でなければ慎重論が圧倒的だった。

感得した「香港金玉論」

その中で、当時の筆者は、かなりの楽観論者であった。その理由は次の三点に集約される。

一つは、歴史的に香港の安定と繁栄を支えてきた「三大要素」（香港人の勤勉さと知恵、英国が構築した諸制度、中国大陸との良好な関係）は、今後も持続されるという確信。中国は主権回復後も香港の安定と繁栄を望んでいる。あの激しい文革時代にも、中国は香港への食糧や水などの供給を止めたことはなかった。まして、改革・開放の道を選択したいま、そんなことは起こり得ない。

二つは、私自身が生活体験を持った場所—台湾、香港、中国大陸、シンガポールを中心とした東南アジア諸国—の中で、中国大陸の内と外を結ぶ重要な拠点として、香港に代わり得る場所はない、という確信であった。

当時、私は漢詩の次の一節を友人たちに強調していた。

「不識廬山真面目、只緣身在此山中」—景観を誇る廬山の真骨頂は、この山だけに身を寄せている人には分からない。つまり、香港の真骨頂は、香港しか知らぬ者には分からない、ということだ。

そして、もう一つは、香港で取材を重ねつつ感得した「香港金玉論」であった。これは生理学上の言葉として聞いていただきたいのだが。中国大陸を男性の身体に例えるなら、香港は金玉だ。この一物は、身体から切り離されれば、つまり分離・独立すれば、本来の機能を果たせなくなる。逆に、体内に吸収されれば、つまり中国大陸に完全に同化されてしまえば、体温の関係でこれもまた機能できなくなる。金玉は、対外の空気に触れさせながら、しかも体内と有機的につながっている、という状態に置いておくこと。

「香港の前途は、こんな摂理の中で動く」—と、私は確信に似た気持ちを抱いていた。

## 中国・深圳経済特区を見る

社会主義と資本主義は、一つの「生活共同体」の中で、どこまで融和し、共生できるのだろうか。こんな興味ある実験が、中国大陸と香港の接点で繰り広げられていた。

中国近代化の前線基地として、一九八〇年五月、広東省南部の玄関口に設けられた「深圳経済特区」がそれだ。

当初、原っぱも同然だったこの地域は、年ごとに様相を変え、私が取材に訪れた八三年夏には、高層ビルの林立する都市形態へと変ぼうしていた。そればかりではない。ここには、大陸各地から各分野の専門家や技術者、労働者の大群が陸続と派遣される一方、九龍—深圳間の完全電化で、これまでの片道一時間が三十五分に短縮され、香港の人々の往来も着々と増えつつあった。深圳経済特区は、新しい社会主義の道を模索する大陸の中国人と、自由放任の中で過ごしてきた香港の中国人が混在するニュータウンと化しつつあった。こんな中で、どんな現象が生まれつつあるのか—。

## 新しい学習と鍛練の場に

「深圳での仕事は、内地（大陸内部）と大きな違いがあります。本当に学習と鍛練の場になっています」

八二年九月、三百人を超える技術者や労働者を編成して乗り込んできた江蘇省基本建設第一会社の楊少華副総経理（副社長）は、こう言って「五個不同」（五つの相違点）を挙げた。内地との違いは、①高層ビルの建設が圧倒的に多いこと、②建設の速度がかなり速い、③質の要求が高く、建築物に対する検査が厳しい、④内地のように上からの指名制でなく、入札制なので、競争が激しく、それだけ自らの責任が重い、⑤計画経済主導型の内地と違って、市場経済主導型である。

同会社は、大陸でも A クラスの建設会社だが、深圳での初仕事は「湖心花園大廈」とい

う二十四階建てのビル建設だった。

設計、工事期間、資材関係、建築費用などをすべて自分ではじき出し、かつ厳しい競争に打ち勝って工事を請け負ったが、内地では二十四カ月はかかるところを、十四カ月で完成できるめどが立った。最近、主体建設を終えたところで検査を受けたが、質、速度、効率、安全生産、施工管理など全項目で「優」の評価を受けたという。

会社では、次の建築物の入札期を控え、技師や設計士が大わらわだったが、「大学入試前のような緊張した気持ちです」と張り切っていた。その代わり、若い労働者を含め皆、内地の倍以上の給料をもらっていると聞いた。労働者たちは、二、三カ月ごとに交代し、新たな経験を内地に持ち帰っているという。

### 「株式会社」も誕生

だが、高層ビルが建っても、そこには商店、企業、工場などが誘致されなければならない。全国各地から各種各様の出先機関が進出し始め、香港や海外華僑、それに外国企業の動きも活発化していた。日本からも銀行や総合商社が中心となり、関連企業やメーカーを伴った深圳訪問が増えつつあった。

こんな中で、新しい動きとして注目されたのは、深圳経済特区発展公司など六つの国営企業が共同出資して「三和有限公司」を設立したことだ。新会社の陸潤玲・執行董事（常務取締役）によると、「三和」とは、①国家資本、②集団・個人資本、③華僑や外国資本一の協調を意味するのだそうだ。この三者から広く「股票」（株券）を募集し、この資金を利用して各種企業を創設する構えだ。

第一期計画は八三年九月から八四年八月までの一年間で、冷凍工場、製菓会社、倉庫、料理店、スーパーマーケット、包装工場などをつくる予定。このほど、二千五百萬元（約三十一億二千五百万円）相当の株券（一株千元、計二万五千株）発行に踏み切ったが、大きな反響を呼んでいるという。

興味深いのは、農家からの問い合わせが百件近くに達していたことだった。というのは、特区開発に伴い、深圳では年間収入が一萬元（約百二十五万円）を超える「萬元戸」と呼ばれる農家が、全体の二〇パーセントにも迫っているからだ。このほか、香港の有力企業「和記黄埔集団」（ハチソン・ワンポア・グループ）から、「四九パーセントの株を購入したい」という注文があったという。だが、一集団による株の大量買い占めについては、役員会で検討中とのことだった。

まさに資本主義の誕生といったところだが、陸さんは、会社の母体が国営企業であること、また株券といっても、資本主義社会のような投機性の強いものではなく、「譲渡制限付株式」にする意向だ、と語った。とはいえ、時を経た現在から見れば何でもなかったことだが、当時としては大きな変容ぶりだった。

### 別離の家族がだんらん

「深圳の実験」は、経済行為だけでなく、広く社会生活全般に及びつつあった。その一つに、中国大陸の内と外に分かれ住んでいる家族が、深圳で同居できる仕組みも現れた。「港澳同胞」（香港・マカオの同胞）や海外華僑が、深圳に住宅を購入すれば、内地の家族を呼び寄せることができるというもので、この措置の特徴は次の三点に要約できる。①住宅購入費が香港に比べ格段に安い、②期限付きでなく永住権を確保できる、③内地にいる家族たちの移籍が保証される。

特区内のある高層団地を訪れると、「アパートを三軒分も購入した」という、広東省東莞県出身の李翼中さん（当時七十一歳）一家に出会った。

若いころ祖父に連れられて香港に出た李さんは、英語を勉強して香港政庁の役人となり、医療関係の仕事に携わってきた。退職後、真っ先に求めたのは「一家だんらん」だったが、文革時代はどうにもならなかった。だが、新政策の到来を知った李さんは、コツコツとためた貯蓄や退職金をなげうって深圳にアパートを購入。長い別離を続けた奥さんをはじめ、

長女と次女の一家を郷里の東莞県から移籍させ、念願を果たしたのだという。アパートの一室に孫たちを集め、小さな黒板を使って懸命に英語を教える李さん。それを見つめる長女や次女の幸福そうな表情が、強く印象に残った。

#### 人気呼ぶ深圳のテント村

観光開発も、見落とせない特区建設の一面だ。その意味で、一般の香港市民にも気軽に利用できる休暇村が、人気を呼んでいるのは注目された。

特区の西北部にある風光明媚な「西麓湖度假村」は、その好例だ。ここには、さまざまな遊覧施設のほか、宿泊設備も野営テント、テラス・ハウス、別荘仕立てまで、いろいろ準備されていた。テント村は一人、一泊二十香港ドル（当時で約七百元）という安さで、若者たちに好評だと聞いた。

責任者は、「ここに集う人数も、最初の一九八〇年が八千人、八一年が八万人、去年の八二年が二十一万人。今年は四十万人と予想され、雪だるま式に増えています」と喜んでいました。

香港では禁止されている花火が夜空を焦がしていたが、若者たちの多くは、遅くまで音楽会やディスコで楽しんでいた。

広州からやってきた女性の人気歌手たちが、数々の流行歌を披露したが、リクエストにこたえ、香港で「レコード大賞」を獲得した「我的中国心」（私の中国心）が登場すると、会場全体から割れるような拍手が起こった。

要するに、「いつ、どこにいても、私は中国人だ」という歌なのだが、こんな場面に、制度の差異を超えた、同じ民族としての共感を、かいま見ることができた。

#### 消えた「心理的なカベ」

文化大革命の始まった一九六六年十一月、初めて深圳を通った。北京の孫文生誕百周年記念式典に出席の途次だった。香港側の羅湖駅から、短い鉄橋を渡って、大陸側の深圳の土を踏み締めるときに覚えた「ここからは別世界だ」という一種の緊張感は、なお、はっきりと胸に残っている。

だが、中国がああ文革時代と決別し、経済建設を至上命題とする「改革・開放」の道を歩み始めたいま、境界線を挟んだ「心理的なカベ」は、すっかり取り除かれてしまった感じである。

そんな深圳駅のすぐ東側で、新総合駅の建設工事が進んでいた。ここには、中国各地の物産とともに、世界各国の製品を常時陳列する大展示館も建設される。その総指揮に当たっているのが、香港屈指の不動産建設会社、合和実業の胡応湘社長。彼はさらに、香港—深圳—広州—マカオを結ぶ高速道路の建設を計画、生涯の大事業として真剣に取り組んでいる。

「香港の安定と繁栄には、中国大陸との深いきずなが必要だ。そのためには、この両者をつなぐ深圳の建設を、是が非でも成功させなければならない。深圳の成否こそ、中国の近代化、香港の繁栄、そして民族統一の将来を占うカギとなる」

工事現場で、壮年社長はこう力説した。

果たして「深圳の実験」は、社会制度を異にする中国大陸の内と外に、同じ人間、同じ民族としての、融和と共生を実現する、活力の源泉となり得るだろうか。明暗と表裏を合わせ、これからも観察を続けていきたい。

#### 大転換期に見た香港の知恵

香港には一九八二年初春から八四年盛夏まで滞在した。「香港の前途」をめぐる中英両国の政府間交渉は、八二年初夏から八四年の秋口まで続いたので、ほぼ全過程を、観察できた。

この二年余り、実に多彩な人物や場面に出会った。先に述べた「香港金玉論」は、大き

な転換期に直面した現地で体得したものだった。往時を想起しつつ、忘れ難い人々との出会いを書き留めておきたい。

#### 中国大陸との共生に意欲

八〇年代初期、香港島で話題の建物は、繁華街・灣仔にお目見えした「合和中心」だった。東京・池袋の「サンシャイン 60」より高い六十六階の円形ビル。最上階から北を望めば、対岸の九龍半島、新界地域、そしてはるかに中国大陸の一角も眺望できた。

地場で屈指の不動産・建設会社を営む合和実業の壮年社長、胡応湘さん（八三年当時、四十七歳）が、自ら設計し、建築したビルだ。その頂上に陣取る社長室を訪ねると、設計図で埋まる巨大な机の向こう側で、胡さんは言った。

「私は香港で生まれ、香港で育った。だが先祖は広東省の出身。狭い香港だけで仕事をするよりも、祖国の近代化に貢献する方がずっと積極的な意義があると決断した」

米国のプリンストン大学で、土木・建築学を専攻した胡さんは、中国が文革路線を大転換した一九七八年以来、五年間で実に八十六回も大陸各地を駆け巡っていた。そして、幾人かの友人と協力し、広州市に十八階建てのホテル「広州大酒家」を建設中。また中国の玄関口・深圳経済特区の新総合駅の建設にも着手。さらに香港―広州―マカオを結ぶ高速道路の建設を手がけようとしていた。

「二十五年前、米国へ留学する途中に立ち寄った横浜と東京間には、まだ原っぱが点在していた。だが、その十年後には東京―横浜間はビルでつながってしまった。香港と広州、そして広州とマカオの間に大幹線道路を造れば、周辺地帯に大小の産業都市ができる。これらを結べば、次の世代には、世界一の大都市圏が生まれる」

夢のような「世紀のプロジェクト」だが、胡さんは千里の道を一步、二歩と力強く踏み出していた。

#### 事業で結ぶ大陸と台湾

「いいときだけいて、悪くなったら逃げる。それは本当の人間のやり方でない」

少年時代に覚えた日本語で、こう語ったのは台湾・莽東県出身の黄仁峰さん（当時五十歳）。香港・新界地域の工場街、荃灣でマッシュルームの缶詰を生産する食品会社の社長さんだ。大陸からマッシュルームを、台湾からは空き缶を輸入。香港で加工した上、日本の商社を通じて、欧米諸国に売りさばく。いまと違い、中国と台湾の厳しい対立があった中で、大陸の農業と、台湾の技術を結びつけた、ユニークな発想の持ち主だ。

基隆の水産専門学校で食品加工技術を学び、台湾や東南アジアで缶詰工場を経営、九年前、香港にやってきた。

原料、労働力、輸出市場に関する綿密な調査を実施し、マッシュルームの缶詰製造を思い立った。中国大陸と取引関係を持つ香港の友人や、華僑系の金融機関などに協力者ができ、中国から大量の原料を確保するメドもついた。

当初は、資金不足で自前の工場を持てなかった。しかし、経営が軌道に乗り出した八二年夏、「香港の前途」問題で世間に心理的動揺が見え出した最中に、わざわざ一九九七年で租借期限の切れる新界地域に、いまの工場を買った。

不動産の値下がりも一因だが、すぐ近くに東洋一のコンテナターミナルを持つ絶好の場所、という見立てがあった。

「香港の将来？大丈夫だ。心配ばかりして、何もしないのが一番いけない。人間は生まれるとき、何も持たないで来た。死ぬときも、何も持たないで行く。それでもともと」

八四年五月、黄さんは六つの会社の持ち主となった。その中の傑作は、血縁関係の多い福建省と台湾を結ぶ「閩台海外集団有限公司」の設立だ。閩は福建省の昔の呼称。狙いは、福建省沿岸からウナギ、エビ、ハゼなどの稚魚を輸入し、香港経由で台湾へ輸出、成育後は主に日本へ出荷する計画だ。

「これ、香港だからできる。そして、台湾にも、大陸にも、海外の華僑にもいい」

中国人としての誇りと、知恵と度胸を併せ持つ人。そして親日家でもあった。

中間派を自認する大人

当時、香港の実業界で注目されていたのは、光大実業会社の王光英会長（八四年当時、六十五歳）だった。中国の故劉少奇・国家主席の夫人、王光美女史のすぐ上の実兄で、一族は古くからの民族資本家であった。

この会社は八三年夏、中国初の民間企業として香港に本拠を構えた。お披露目宴には、往時の趙紫陽首相、鄧穎超女史（故周恩来首相夫人）、万里副首相らが花束を寄せ、皆を驚かせた。

中国が送り込んだ“赤い資本家”と騒がれたが、派手な活躍ぶりが人目を引いた。南米のチリからベンツのトラック千五百台を購入。香港島のビジネス街や住宅街で土地やマンションを買収。米国の会社と合併で、中国と香港にコンピューター工場を造る契約に調印。が、半面、いろいろな陰口も出始めた。どんな人物か。何を考えているのか。会見を求め、ざっくばらんに聞いてみた。

—あのベンツは中古で、寒冷地帯では走れない代物、という声が出ていますが。

「中古といっても三百キロ程度走っただけ。慣らし運転の範囲だし、零下三〇度近くまで走れるから心配なしだ。あれからまた七百台を追加購入したよ」

—よく資金が続きますね。

「いやあ。いま、銀行には資金が余っていて、いくらでも貸してくれるからね」

—香港には、中国の政策が変わるのを心配する人々も多いですが。

「その気持ちは、私なりに理解できる。過去にもいろいろあったからねえ。最近、国内の農村を旅行していたら、青年が寺院でお祈りをしていた。若者が何を、と聞いて聞くと、二つあるという。鄧小平さんの長寿。もう一つは、いまの改革・開放政策が長続きするよように。そう願う人は本当に多いよ」

—香港の将来については？

「こんなに勤勉で、知恵のたくさんあるところは少ない。中国政府も資本主義制度を長く続ける、と内外に宣言している。それが香港にも、大陸にも、台湾にも、日本や他の諸国にとってもいいのだから」

—ところで、ご兄弟がずいぶんたくさんいますね。

「兄妹しめて十一人。上の五人が全部男。下の五人が全部女。私はちょうど真ん中の六番目。だから中間派だよ。ハッハッハ」

“赤い資本家”は、ユーモアたっぷりの「大人」でもあった。

犬の本体としっぽの関係

働き盛りの三十歳代にも、頼もしい人材はいた。ある日本企業に勤める譚兆璋さん（当時三十五歳）もその一人。

香港大学で生化学を専攻し、卒業後は米国系銀行で経済分析、市場調査をやった。その後、職を転じてコンピューター関係の仕事をし、日本企業の中国問題顧問へ。香港と中国大陸、特に深圳経済特区との経済・技術交流に尽力していた。また、北京語の普及運動にも情熱を注いでいた。自らは、広東語の世界である香港に生まれ、育ったのに、若者たちに中国の標準語を教える。夜間の自由時間を活用し、五年以上も続けていた。

—香港は香港。大陸は大陸。こんな割り切り方をする人が多いが。

「私自身がそうだった。だけど、香港の前途を考えると、どうしても中国大陸との関係を考えざるを得ない。北京語を教えているのもそのためです」

—しかし、金持ちや専門家の間には、外国移住を真剣に考える人々がかなりいる。

「私は逆に、子供の将来を考えると、移住はできない。金がないこともあるが、それよりも慣れない土地で、自分がどこの誰か確信できない生活は、かわいそうだ」

—あなた自身は、香港をどう見ているか。

「香港には“三民主義”がある。移民、難民、植民のことだ。それに『おもらい主義』を付け加えてもよい。食糧や水などは中国大陸に依存し、法律や経済、社会制度は英国に依存している。残念ながら、自分自身のものがない。だが、香港人には自由な思考力、臨機応変さ、高い技術と、仕事の効率がある。こんな英知が、過去にも幾度か、危機や試練を克服する原動力となってきた」

—あなたはいま、香港と大陸との交流に、全力投球しているように見えるが。

「大陸と香港の関係は、一匹の犬と、そのしっぽのようなものだ。しっぽは犬の本体を左右することはできない。だが、犬自身に活力があれば、しっぽは自在に活動する。活力がなければ、しっぽは萎えてしまう。われわれは前者のような関係を望みたい。その意味では、大陸の人たちが、もっと自らの安定と繁栄に、努力してもらいたい」

### 「香港の前途」に賭けた人々

香港時代に出会った忘れ難い人々は、中国人のほかにもずいぶんいた。ここには、その中から四人の方々を取り上げておこう。中英交渉の前途が不透明で、圧倒的多数が心理的動揺を隠せなかったころに、いずれも「香港の将来」に賭けていた数少ない人たちであった。

#### “半個中国人”の政務長官

当時、香港にいた英国人について言えば、大別して三つのタイプがあった。最後まで統治者として振る舞おうとする人。香港を見限って本拠を他へ移す人。この地の安定と繁栄に希望を抱き、自己の職責を全うしようとする人。

その中で、私が最も引かれた英国人は、香港政庁のエーカー・ジョーンズ政務長官（一九八四年当時、五十七歳）だった。香港全域にまたがる十八の地方行政区を統率する要職にあり、ここでは指折りの高級官僚であった。

この人には、他の指導者と違う三つの特色があった。一つは香港在職二十五年というケタ外れに長い記録。二つには、その間ずっと、香港全域の九ニパーセントを占める新界地域と、離島の開発に当たってきたこと。それだけに、香港の繁栄を底辺で支えてきた民衆との接触が広く深かった。三つ目は中国語。南部の代表的方言である広東語に堪能で、標準語の北京語も、ここ数年来の努力で、かなり上手に話せるようになっていた。

土地の人たちも、「彼の言葉には、黙って耳を傾ける」と言った。五十五歳で定年になった後、周囲の強い要請で再び現職に。以後も、特に地方の土地開発、新都市建設に心血を注いできた。そして、二十年前、いや十年前でさえ、田んぼ同然だった新界地域を、高層ビルの建つ工業地帯、巨大な住宅団地へと変ぼうさせた。その陣頭に立って、市民の信頼を勝ち得た人だ。

エーカー・ジョーンズさんとは、何度かお会いし、私邸を訪れたこともあった。

「香港の人たちの熱心な支持と協力で、何とかやってこられた。ずいぶん長くここで仕事をしてきたので、人々の心や習慣にも、すっかりなじみました。“半個中国人”（半分は中国人）になってしまった」

そのころ、中国側からは、香港の将来について「一国両制」（一つの国家、二つの制度）、つまり中国本土は社会主義制度を続けるが、香港は主権回復後も相当期間、資本主義制度の存続を認める、という構想が伝えられ出していた。だが、香港の資本家や専門家層の間には、その実現の可能性について疑問を抱く者も少なくなかった。この点を質すと、長官は、

「前例がないし、確かに難しいと思う。しかし、皆が知恵を出し合って、挑戦する価値がある。圧倒的多数の人たちは、いつまでも、ここで生きていくのだから」

と冷静に対応した。

そして、中英会談と「香港の前途」については、「私は、中英会談が必ず、香港の人々に

受け入れられる形で合意に達する、と信じている」と語っていた。

あるとき、「あなた自身はこれからどうされるのか」と尋ねてみた。すると、「ここに家を買った。働けるだけ働いて、退職したら、妻と二人で、ずっと香港にとどまります」

と言った。子供が二人いたが、子息を交通事故で失い、娘さんも結婚した。仕事の合間を縫って、新界地域の山々を散策し、風景画を描くのが楽しみと語っていた。使命を果たした後、ここで骨を埋めるつもりらしい。心安らかな人だった。

「捨てる神」と「拾う神」

香港の将来をめぐる中英交渉は、幾度か暗礁に乗り上げ、長い間、中断される事態も続いた。その中で、前途に不安を抱き、ここを「捨てる神」も相次いだ。その典型的な例が、英系の最大手商社、ジャーディン・マセソン社。すでに百年以上、香港を拠点に活躍してきた名門であった。裏を返せば、「アヘン戦争」（一八四〇—一四二年）前後から、英国の植民地経済史と密接に結びついて発展してきた大企業だった。

「他地域での事業推進や株主への配慮から、今後も長期間にわたって、英国の法体系の下で活動を続けていきたい」

同社のサイモン・ケズウィック会長は一九八四年三月下旬、こう言って、登記上の本拠を西大西洋上に浮かぶ英自治領、バミューダ諸島に移す決定を下した。中国が香港の主権を回復するであろう一九九七年以降への不安をのぞかせた判断だったと言える。

だが、逆に、これからの香港は、中国と世界、社会主義と資本主義、そして東西文化を結ぶユニークな国際都市であり続ける、との積極的な企業判断もあった。一九八三年十一月に香港へ進出してきた、世界的に著名な米国のポール・ワイス法律事務所がその一つだった。

「近代化を至上命題とする中国は、二十一世紀へ向かって、不可避免的に開放政策をとっていく。その際に重要なのは、中国の伝統的な法慣習と、国際的な法体系を、互いの立場を尊重しつつ、いかに双務的なものにしていくかだ」

こう語ったのは、米国のハーバード大学や法曹界で活躍を続け、ポール・ワイス香港事務所の責任者として赴任したジェローム・A・コーエン教授（当時、五十三歳）だ。中国問題研究者としても、国際的に知られた人であった。

一なぜ、教壇を降りて香港へ？

「生活の本拠をここに移したのは、やりがいのある仕事があるからだ。中国と外国との関係は、政治の時代から経済の時代へと、大きく動いている。合弁、投資、技術移転などは、いまや重要な現実的課題だ。そこで、豊富な実例によって取引の実態を知り、それを法律化していく仕事が、緊要になる。その意味で、香港は生きた勉強ができるところだ」

一実際には、複雑で困難な仕事だと思われるが。

「もちろん。理念やスローガンはやさしいが、具体化には時間と努力が必要だ。が、華南経済圏や南海油田・深圳経済特区の開発などで、実際の需要はどんどん増えておりへ前途を楽観している」

教授は、巧みな北京語で「少説空話、多做工作」と言って笑った。空理空論をぶつより、少しでも多く実際の仕事を、と意欲を燃やしていた。

野村がアジア進出の拠点に

香港経済が停滞気味だった中英交渉のさなか、ここをアジア進出の拠点とし、積極的拡大策に乗り出す日系企業もあった。その先端を行くのが野村証券グループで、新しく香港の中心部にできた四十八階建ての「遠東金融中心」の最上層部、四十六、七、八階を買入れた。

一九八三年五月の開幕式には、日系企業のほか地元の華僑系や外国企業の経営者を千二百人も招いて、当地の政財界の間で大きな話題となった。その推進役が野村証券の「中興

の祖」と言われた瀬川美能留相談役（故人）だった。式に出席のため来訪した瀬川さんに、野村グループのアジア進出の戦略方針を聞いた。

「香港の将来が不透明なため、昨秋以降、株価、為替、不動産が影響を受けている。その政治的解決は中英両国の外交交渉を待つほかない。だが、香港の前途をビジネスマンの立場で考えると、次の二点は無視できない。第一は東アジア、東南アジア地域は一九八〇—一九〇年代にかけて、世界で最も高い経済成長を続けるだろうこと。第二は現在の政策が持続すれば、中国は『二十一世紀の経済大国』になるだろうこと。この二点から地理的に最も枢要な地位にある香港は、一段と重要性を増すだろう。われわれが遠東金融中心にフロアを買ったのも、そうした判断からだ。めざとい外国企業が不動産購入に動き出したのも同じ考え方だと思う。一九九七年問題は、樂觀を許す方向で決着すると信じている」

瀬川さんは、日本・香港経済委員会の代表メンバーの一人で、すでに二十回も香港に足を運んでいる事情通でもあった。野村グループの香港での今後の活動戦略を尋ねると、「現在、野村国際（香港）、野村総合研究所、日本合同ファイナンスが、現地資本一〇〇パーセント会社としてある。戦略方針は、野村国際を中心に進める。①株式部門、②公社債、為替、銀行部門、③ビジネス・コンサルティング部門の三分野で活動しているが、『コンピネーション・バンク』を目指し、これらの境界領域をカバーできる仕組みをつくっていく」「香港には通常の銀行以外に、三百五十を超す『デポジット・テイキング・カンパニー』（預金受け入れ会社）があり、特に優良なものには大口受け入れが可能なライセンスが出されている。野村国際は、この第一次認可を受けて以来、①と②の連携が著しく進んでいる。これを一層促進させる。同時に③についても、中国大陆をにらみつつ、合弁相手や技術導入のあっせんなどを強化する」

と言った。そのためには、現地の有能な人材の登用が大切だと思うが、と質してみた。

「その通りだ。昨年海外拠点で採用した優秀な人材を、東京で六カ月間かけて研修し、スタッフの養成に大きく踏み出した。今年は香港で十人強採用する予定だが、すでに香港大学から百人、香港中文大学から百五十人の応募者たちが殺到している。現地で採用した優秀なスタッフには、高い給料を払い、いずれ役員にも、どしどし登用していく考えでいる」

豆タンクのような瀬川さんの、確固として明快な戦略方針であった。

#### ヤオハン、新界地域に登場

もう一人、忘れ難い日本人がいた。一九八四年から十年余り、中国ビジネスの「第一人者」と言われるまでに名を馳せたヤオハン・グループの和田一夫社長だ。和田さんは当時、外国企業が二の足を踏んでいた新界地域への進出を目指し、最大の新興都市・沙田に売り場面積で東洋一のスーパーマーケットを建設しようとしていた。

そして、グループの首脳陣を引き連れて、その可能性を打診していた。総合商社、金融関係、不動産・建設、流通業界、さらに報道機関に至るまで、香港に来ている日系企業の代表たちに、丹念に判断を求めて歩いた。筆者も意見を求められた一人だった。

すでに香港全域をすみずみまで歩き、とりわけ新界地域に何度も足を運んでいた私は、「いまこそ絶好のチャンスだ」と断定的に進言した。なぜか。

①香港の前途に不安を抱く企業家や専門家が多い中で、実際には新界地域の開発が北へ北へと延び、大団地の建設が急ピッチで進んでいる。②大家族主義だった香港の核家族化が進み、特に新婚家庭がどんどん新界地域へ移動している。③香港が不安定だといっても、九〇パーセント以上の市民は、ここで生きていくほかに選択の道はない。④一方、中国大陆も近代化政策で急速に変化し、資本主義社会に接近してくる。⑤香港人の生活感覚は中国大陆や台湾、さらに欧米諸国よりも日本の流行を追いかけている。⑥新界の団地サイズを見ると、日本の家具類や電気製品が一番ぴったりだ。⑦また、これからの新界地域ではベビー用品がどんどん売れるだろう。⑧沙田のほか新界地域の数カ所にスーパーをつくれれば、百貨店の高級商品に手の届かぬ人たちを大量に引きつけることができる。⑨ここで有

力な華僑や地元の人々との付き合い方、商売のノウハウをつかみ、機が熟したら中国大陸へ進出されるといい—私は、誠心誠意、自己の体得したものを話した。

結局、和田さんは新界進出を決断した。その後、ある香港特集の雑誌の中で、和田さんのインタビュー記事を読んだ。その中に、こんな一節があった。

「私は、百人の人たちの意見を聞いたが、九十九人が反対か慎重論だった。一人だけ、断定的に進出せよ、と言った人がいた。それはマスコミ関係の人だった」

ジーンと来るものがあった。和田さんへの進言は、祈りを伴った私の本音だった。そして、それを教えてくれたのは、台湾、シンガポール、中国大陸、香港で生活し、取材した数多くの人たちの豊かな知恵であった。

「香港の前途」を覆っていた政治的な霧は、一九八四年春以降、ようやく晴れ始めた。この機会をとらえて、『朝日新聞』紙上に「転換期・香港の知恵」と題して、十回ほどの連載ものを書いた。

そのころ、本社から異動の通知があった。「アジア総局長としてシンガポールに赴任せよ」という辞令だった。交渉の成り行きを最後まで見届けたいという気持ちが働き、後ろ髪を引かれる思いだった。

中英交渉は、この年の九月に終わった。英政府は一九九七年七月一日に、香港全域の主権を中国に返還する立場を確認。中国側は、主権回復後も五十年間は、香港に資本主義制度を存続させることを約束した。二年間にわたった両国政府間のタフな交渉は、ついに「大いなる妥協」に達したのだった。